

チェルノブイリ通信

<https://www.cher9.org/>

NPO法人
チェルノブイリ医療支援ネットワーク
〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2-5-11-5F
TEL/FAX: 092-260-3989
E-mail: jimu@cher9.org



チェルノブイリ医療支援ネットワーク（CMN）は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、現地から求められる医療支援を行います。この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心と心のつながりを深めます。

No.

136

特集 原子力災害の検証は二合目へ

CONTENTS

原子力災害の検証は二合目へ / 原発事故被災地で暮らす / 飯館村の夏 /
コラム ミンスクの1日 / ふくしま訪問を振り返る / リサイクル募金
きしゃぼんのお礼とご紹介 / シンカプルのご紹介 / チェルノブイリ支援
コーヒー・紅茶購入キャンペーン / 支援者のお名前とメッセージ



2024年3月11日

（南相馬市小高区東町（双葉屋旅館前））

オンライン版への
アクセスはこちらから



本紙はチェルノブイリ医療支援ネットワークの活動を
支援して下さっている皆さまへお届けしています。
送付がご不要な場合は事務局までご連絡ください。

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？
ご寄付を受け付けています。

ゆうちょ銀行

記号 17460 番号 52319621

他の金融機関からは 七四八支店 （普）5231962

楽天銀行

ジャズ支店（支店番号201） （普）7017104

住信SBIネット銀行

法人第一支店（支店番号106） （普）1030416

※口座名はいずれも「NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク」

【福島レポート】 原子力災害の検証は二合目へ

(原子力災害検証館 furusato 鈴木亮)

福島県は浜通り、富岡町からこんにちは。

鈴木亮と申します。51歳、5歳の長女と2歳の長男の、2児の父です。生れは鎌倉。3.11から13年と4か月が過ぎます。震災支援の仕事で2012年9月に福島市に住み始め、2017年4月には浜通りの富岡町へと引っ越し、2019年9月から家族で住み始めました。今回、ご縁あって寄稿させていただく幸運に恵まれ「なんでも自由に書いてください」と言っていただけだったので、拙い文章で恐縮ですが、いわゆる「3.11」について、僕が実践している「原子力災害検証館 furusato（ふるさと）」の物語を綴らせていただきたいと思います。もしこの文章を読んで、福島に行ってみようかな、あるいはオンラインの企画に参加してみようかな、などと思っただけの人が一人でもおられましたら幸いです。

原子力災害検証館 furusatoとは

哲学者である故・梅原猛さんは「原発の事故は天災であり、人災であり、『文明災』である」と訴えました。著書「耄老（もうろう）」と「哲学」の中で、「草木国土悉皆成仏（そうもくこくどしつかいじょうぶつ）」という涅槃經の言葉で、3.11の教訓を表現されています。東日本大震災復興構想会議委員に選出された玄侑宗久和尚が梅原さんの言葉を菅首相（当時）らに届け、10年後、菅さんは「原発事故10年目の真実―始動した再エネ水素社会」を著します。多くの有識者や活動家、当事者団体や名もなき個人が「原発なき世界」を求めましたが、その実現の道筋が見えるという人は少ないのが現状ではないでしょうか。毎月のように、3.11にまつわる書籍やアート作品、そして報道やイベントが生れては通り過ぎていきます。風化が進んでいるとも言われますが、関心のある

一定の層にとっては、あれから13年の年月を経ても、血は流れ続け魂は揺れ続けています。日々、東京電力福島第一原子力発電所（いちえふ）そして第二原発（にえふ）に挟まれ、廃炉だ処理水だ帰還困難だといった報道や論争に囲まれて暮らしています。麻痺してしまわないこと、鬱にならないこと、そして絶望に沈まないことを心掛けながら、より良い未来を目指してあがいている日々です。



晴れた日には磯遊びをすることもある富岡の浜辺。

第二原発（ニエフ）の排気塔と建屋がある風景は震災前からの「ふるさとの日常」。

震災から10年目の2021年3月12日、いわき湯本温泉の旅館・古滝屋の9階に「原子力災害考証館furusato」が開設されました。あえて3月11日ではなく、原子力災害による強制避難が始まった3月12日を選びました。（この年の3月11日には、双葉郡檜葉町の宝鏡寺に、「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」も開設されています。）考証館furusatoの館長は、発起人であり同運営委員会代表の、古滝屋当主・里見喜生さんです。震災当時、里見さんは自らが被災していながら、救援物資受け渡しの拠点として、またボランティアの宿泊所として旅館を提供したり、NPO法人を立ち上げたりしながら、被災地のスタディツアーの企画・ガイド活動などを通じて、福島県浜通りの住民と福島県外の人々との交流を図ってきました。「何が被害を深刻化させたのか。私たちは何を失い、何に気づき、何を取り戻さねばならないのか。命の営みにとって本当に大切なものは何か。それを二度と失わないようにするために、どのような社会にしていけばよいのか。そうした一つひとつの問いに、向き合える場所をつくりたい」という思いで、「原子力災害」を「考証」する展示室を設



原子力災害考証館furusatoは対話と考証の空間。中央にあるのが木村紀夫さんの汐風ちゃん捜索現場のジオラマ。

けました。民間アーカイブ施設の先例である水俣病の「水俣病歴史考証館」や、成田闘争の「空と大地の歴史館」等をヒントに、原子力災害の被害・原因・解決のための取組を体系的に整理し、市井の人びとが取り組んできた測定や対話、伝承や裁判といった、原子力政策に根差す課題などを付度なく扱い、伝承すべきは何か？考証すべきは何か？行動すべきは何か？を問いつつ、対話し続ける場を福島に訪れる人（そして福島に生きる人々）のために作ろう、というささやかな取り組みです。その里見さんが、僕たち夫婦に「一緒にやりませんか？」と

声をかけて下さいました。里見さんの人柄に惚れていたこともあり、二つ返事で「私たちがよろしければ、ぜひ」とお答えしました。

伝承のあり方を問いつける

2024年現在、furusatoでは以下の7つの展示が行われています。大熊町の木村紀夫氏「One Last Hug 命を探す」、浪江町の歌人・三原由紀子氏「ふるさと」は赤」、30年中間貯蔵施設地権者会「私たちが失ったもの 取り戻したいもの それは“ほんとうの笑顔”」、福島10の教訓／原発災害から人びとを守るために」、集団訴訟を網羅的に考証する「裁判、今どのあたり？」、避難者訴訟原告団長・早川徳雄和尚追悼展示、そして2024年3月に別室にオープンした「子どもと



南相馬市小高区の「おれたちの伝承館」



「櫛葉町のヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」

原子力災害・保養資料室《ほよん》です。木村さんの遺体捜索のジオラマには遺品の実物が触れられる形で展示され、詩や写真、書籍や報道資料、裁判の訴状なども自由に閲覧できます。誰でも触れて、寝転がって資料を読める、ちよっと変わった伝承施設と言えるでしょう。資料のほとんどは寄贈されたものです。来館者の中には「私は声を出せない。（考証館を）作ってくれてありがとう」という人もいました。未整理の資料、構想段階の展示企画は山積

しています。震災伝承に特化した「3・11メモリアルネットワーク」や、公害問題をつなぐ「公害資料館ネットワーク」などと連携して毎年意見交換会やスタディツアーを不定期で開催しています。公設・官製の伝承施設は公的資金を受ける以上、風評払拭や復興の情報発信という命題を負い、展示もその制約を受けざるを得ない側面があるでしょう。一方で、考証館 furusato に限らず、櫛葉町・宝鏡寺の「伝言館」や南相馬市小高区の「おれたちの伝承館」といった民設民営の伝承施設の存続は、伝承の多様性としてとても重要だと思えます。福島に來られた際は、ぜひ訪問してください。北から「おれ伝」→宝鏡寺・伝言館→古滝屋・考証館 furusato の民間3施設と、双葉町の県立伝承館、富岡町の東電廃炉館、大熊町の中間貯蔵工事情報センターの公設3施設を回るルートを推奨しています。2019年にオープンした民設の双葉郡8町村の情報交流センター「ふたばいんふお」は「住民目線」の地元情報が入手できる貴重な施設でしたが、公設のアーカイブ施設やコワーキングスペースが復興予算で立ち並ぶ中、2024年3月、惜しまれながら活動を終えました。

問題の現場に常設の情報掲示板がある意義を考えさせられます。



水俣・百間排水口の案内板



福島・エコテッククリーンセンターへの抗議の看板

水俣の地を歩くと、町の中に水俣病事件の歴史を伝える案内板がいくつも建っています。負の歴史を教訓として継承し続けるのは大変な困難さを伴います。福島、特に浜通りにもそういう万人に訴える形式の案内板が必要だと思えます。施設を訪れるのは関心のある人が中心ですが、「過ちを繰り返さない」ためには、より広い層への、より直接的な訴求を諦めてはならないと信じています。

今、裁判どのあたり？

考証館 furusato では2023年12月に、双葉町の原子力災害伝承館にて、意見交換会「今、裁判どのあたり？」を開催しました。

22年11月に「最高裁判決を超えて、多視点から原子力災害を考える」をテーマに開催した後継企画でした。避難者訴訟の金井直子事務局長にご登壇いただき、除本理史先生（大阪公立大学）、清水奈名子先生（宇都宮大学）にテーマに沿ってコメントいただきました。参加はオンラインも入れて40名ほど。動画と資料を公開しています。22年6月17日の最高裁判決（生業、千葉、愛媛、群馬の4訴訟）で「国の責任を認めず」とされてから一年半、不十分ながら東電の追加賠償と、和解の動きも進んでいます。

続く訴訟（いわき市民訴訟、愛知岐阜、千葉、宮城、神奈川）では617判決の追従が続いています。悪世末法とはこのこと。今年6月17日には判決から2年の節目ということで、最高裁を取り囲む「人間の鎖」アクションや講演が実施され約千人が集ったそうです。当日の集会のリレートーク動画からも、粘り強く運動が続いている各地の方々の想いが伝わってきます。長い動画ですが、ぜひ視聴してみたいかがでしようか。

水俣病では加害企業であるチッソがアセトアルデヒドを生産開始してから、公害認定されるまで36年間、汚染の継続がなされました。公害認定は1968年。チッソがアセトアルデヒド生産を中止したのと同じ年です。さらに20年後にチッソのトップに業務上過失致死罪の判決が出て、刑事責任が確定します。そして2004年に関西訴訟最高裁判決で国と熊本県の被害拡大させた責任が認められています。以降も、未認定を撤回させる訴訟は続いて、問題は半世紀を超えて現在進行形です。残念ながら裁判所が国を断ずるには、その危険な技術が別な技術（そして利権）に置き換わって初めて実現するものなのだ、と歴史は証明しています。東電の賠償

【動画】

今、裁判どのあたり？（2時間23分）

<https://www.youtube.com/watch?v=bo5fpbZyq3s>



【動画】

6.17最高裁共同行動講演・シンポジウム
（2時間27分）

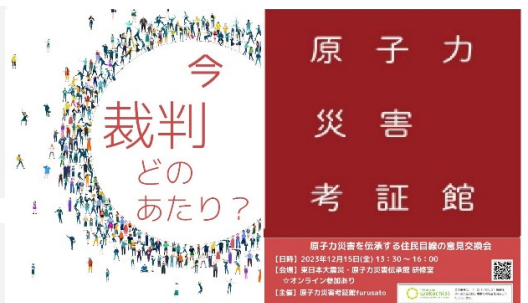
<https://www.youtube.com/watch?v=c5gO4QzXLu8>



【参考リンク】

賠償訴訟一覧（セブンジェネレーションサステナビリティ）

<http://nuclearpowerplant311.livedoor.blog/archives/12143668.html>





考証館furusato館長・里見喜生さんと古滝屋にて。訪れてくれる人たちと時間を気にせず語らう時間が未来を変える裾野である、と確信。

の不十分さ、国策である原子力政策の責任の所在、低線量被曝における科学論争の行く末、そして奪われたものへの詫びと赦しへの道程は、未だ一合目から二合目にさしかかるあたりに過ぎないのだと思います。裁判に参加することで見えてくる「未来」があります。裁判に勝つことで始まる「反省」「教訓」「対話」があります。考証館furusatoでは、その一助となるような展示を目指しています。

一緒に考えてください

考証館furusatoの活動を通して、ありがたいことに県外や海外から福島を訪れる人は後を絶ちません。育児や生業の傍ら、時間の許す限りガイドや対話の機会を大切にして、「原子力災害の考証」の輪を広げていきたいと思っています。2030年にはICRP（国際放射線防護委員会）の基本勧告の改訂、2045年は中間貯蔵施設の放射性廃棄物県外搬出完了が予定されています。廃炉も、海洋放出も、数ある課題のひとつですが、言ってしまうえば原子力災害も核兵器も、各論のひとつにすぎません。「どうすれば人類が道徳的に成長できるか」が本質的なテーマであり、そのフィールドが、僕にとっては福島だっただけ、と考えています。世界のあちこちで、それぞれの課題に立ち向かっている仲間たちがいて、時々少しの時間だけ一緒に交わることがある。その繰り返しです。福島に来て、そこで見て触れることから気付くことは多いと思いますが、圧倒的に多くの重要なものは、見て触れることはできません。この地でガイドをする難しさにいつも悩んでいます。

チエルノブイリ医療支援ネットワークさんの「2024年福島レポート」を読ませていただきました。訪問五回目の田中静瑠さんと、訪問四回目の平江莉子さんの文章、とても心に響きました。訪れてくれた方のレポートを読むと励まされると同時に、ガイドの至らなさ、不甲斐なさを痛感します。言えないこと、出来ないこと、価値観の押し付け、あきらめと自嘲さ。いつも不完全燃焼に苛まされます。そんな自問自答に、巻き込んでしまっているだけと言えるかもしれません。要は「一緒に悩んで考えてください」というのが、僕のスタイルなのだと思います。原子力災害の考証がようやく二合目に差し掛かったかなあ、と思うようになったのも、多くの人とあだこうだと試行錯誤して感じた肌感覚です。こうして文章を書くのも、まったく得意ではなく、とんでもなく時間がかかってしまします。それでも、やらないよりはずっといい。悲しいのは辛いですが、悲しくないのはもっとつらい。流れ続ける涙の分、笑える瞬間がたまらなく嬉しい。無念のまま死んでしまった多くの人たちの分も、生きようと思います。新たな出会いが、新たな考証へとつながることを信じて。



鈴木一家。富岡町、夜ノ森にて。2023年春。

【著者プロフィール】

鈴木亮（すずきりょう）

1972年神奈川県鎌倉市生まれ。ニュージーランド育ち。98年より環境系のNPO活動に参加。震災後、2012年9月よりJCN福島担当に。福島県双葉郡富岡町在住。スズメ好き。ふたば地域サポートセンターふたすけ所長。原子力災害考証館furusatoコーディネーター。

【アクセス】原子力災害考証館furusato

いわき湯本温泉「古滝屋」9階

（〒972-8321 福島県いわき市常磐湯本町三函208）

電話：080-7028-6128

メール：furusatondm@gmail.com

<https://furusatondm.mystrikingly.com/>



ご支援・ご協力をありがとうございます！

読み終えた本やCDなどで募金ができる「古本募金きしゃぽん」を通じて、たくさんのご寄付をお寄せいただいております。

誠にありがとうございます。引き続きよろしくお願いいたします！

◀ これまでにお寄せいただいた寄付額 ▶

◆◆ **1,398,028円** (468名) ◆◆

あなたのご自宅や職場に眠るお宝が

チェルノブイリ支援につながります

◆2017年～2020年	810,147円 (290名)
◆2021年	292,568円 (80名)
◆2022年	135,740円 (44名)
◆2023年	40,704円 (36名)
◆2024年1～8月	118,869円 (18名)

本	CD	DVD	ゲーム	貴金属	ブランド品

その他、フィギュア、プラモデル、鉄道模型、洋酒、テレホンカード、商品券、切手、ハガキ、年賀状、カメラレンズ、模型、絵画、万年筆など…

クレジットカード決済・シンカブルのご案内

クレジットカードで寄付ができる“Syncable(シンカブル)”を導入しています。

チェルノブイリ医療支援ネットワークのホームページや右のQRコードから

アクセスが可能です。



「福島レポート」

原発事故被災地で暮らす

～混沌と葛藤を乗り越え、対話から熟議へ～

首都圏から双葉郡富岡町に移住して5年が経った。一部避難指示解除となり住民が戻り始めた2017年当時と比べると、こども園の園児数は当初の11名から60名へと増え、ファミリーでの移住者も珍しくなくなった。



富岡夏_富岡の海

この町での暮らしを伝えることは、とても骨の折れる仕事だと私は思う。ただ、専門家でもなく被災者でもない私が唯一できることは、やはりこの地に住むことなのだ。この気持ちだけは年々、強くなっている。

混沌とした今の状況と、それに対する自らの気持ちと言葉にするのは難しい。だからこそこうした執筆の機会を頂けたことに心から感謝したい。

1. 移住に至るまで

もう15年以上も前になるが、大学で環境社会学を専攻した私は、後に原子力市民委員会座長となる故船橋晴俊教授のゼミ生として核燃料サイクルと地域社会をテーマにフィールド調査等を行い、なぜ90年代初めから住民運動が急速に衰退していったのかについて考察などを行った。

原子力災害考証館 furusato
事務局長 西島香織

その時から「公論形成はいかにして可能か」をテーマに据えていた。「公論形成」は、「合意形成」とも「世論形成」とも異なる。市民が主体的に議論に参加し政策論争を経て、熟議の上に成り立つものだ。環境社会学研究において、「公論形成の場」を豊富化することは問題解決論の要と考えられている。

しかしなぜそれが、特に原子力政策や廃炉プロセスにおいてうまくいかないのか。なぜ、権力者の意見が非論理的であるにもかかわらず採用されるのか。なぜ一番の被害者がこれほどまで日常を犠牲にして闘わねばならないのか。私は知りたかったし、改善したいと思っていた。この問いが、移住に大きく関わっている。

移住前の私は、東京の環境NGOスタッフとして原発・エネルギー問題に取り組んでいた。再エネや核ごみに関する、電力会社や自治体へのアンケート調査を行ったり、霞が関で院内集

会を開催したり。

一方で福島県二本松市に通った。汚染された土地や消費者との繋がりを再生させる有機農家たちの取組みから、身土不二（人間の暮らす土地と身体は二分できない）の考え方と市民主導・地域主権のあり方を学んだ。遊雲の里ファームの菅野正寿さんからは、「何か地域社会を変えたいと思ったらまず、自分自身が地域に根差すことだ」と教えられた。

当時活動を共にしていたメンバーが今の夫だ。環境NGOでボランティアスタッフを続ける傍ら、東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）の福島担当として、2013年から福島と東京を往復していた。私と結婚した後も二拠点生活だったが、出産を機に転機が訪れた。

私はとりあえず、埼玉の実家で出産した。その後半年間、どこに根を下ろすか悩みに悩んだ。放射能に対する健康への不安はもちろんあったが、そもそも富岡町に住むことが原子力災害を軽視し原発を容認することに繋がりで、そんな自分をとてめ赦せなかった。今思えば、周囲に、富岡に住む理由を説明できるか否かも、移住できるかどうかの重要なポイントと

なっていた。職業柄、放射能の危険性に厳しい意見の同僚や先輩が多かったのだ。

「子どもが可哀そう」「子どもにも人権がある」という人の声が一番、こたえた。富岡町に住んでいる娘は「かわいそう」な目で見られるのではないか。自分自身の中にあつた差別意識が、小さな娘を介して鮮明に浮き上がってきたときの気持ちの悪さは、今も覚えている。

移住を決断できたのは、他でもない地域住民たちのお陰だった。夫に誘われて1週間、「お



富岡町_一本道を進むと海にたどり着く

試し移住」をした。そこでは、私が悩んでいる間にも「二度と故郷を失わない」と決意した人たちが帰還者もいたし、移住者も沢山いた。が、再び町を作り直していた。帰還困難区域での遗体捜索やがれき撤去の話も聞いた。その姿は、一度汚染されてしまった土を耕す有機農家の背中に重なった。それは、「復興予算」でガシガシ建物が建っていくイメージとは全く異なる、傷つきながらも地道でまっすぐな、住民の姿だった。



富岡冬_復興の「富あかり」



富岡春_菜の花畑

2. 本当の対話、そして熟議への挑戦

時として、多様な利害、多様な想いが渦巻く中でおぼれてしまいそうになることがある。

混沌は町の中だけではない。国策と日常の狭間で。県内外で活動する先輩・同僚たちや、多様な組織との議論の合間で。一旦力を抜いた瞬間に大きな渦の中に飲み込まれていく自分を想像することがある。でもそんな時は、本当は何がしたいのかを自身に聞いてみる。私が分かっていることはこれだけだ。対立は、何も生まな

いということ。対話は、新しいものを生み出すということ。

これは10年以上、何度も自分に問うてきた。

対話。これはもう、放射性廃棄物問題でだいぶ手あかのついた言葉になってしまったことを残念に思う。本来、対話は馴れ合いではないし、ましてや理解／啓蒙活動でもない。「意見の異なる者同士が対等な立場で互いの意見の背景事情を理解しながら、よりよい解決策を見出すプロセス」だと私は解釈している。

原発を推進する側も、原発をなくそうとする側も、対話が大事と言いながら対立に向かうか、対立を恐れて対話の場につかない場合が多い。まれに、北海道や岐阜県瑞浪市の地層処分研究に関する院内会合などでは市民側が対話の姿勢で質問を投げかけるが、官僚側の返答がそうはならなかった事例がある。一方で、北海道寿都町の住民活動の中で、改めて対話の意義を問い直す動きもある。

私は、自分の納得いく形での対話の場をつくりたいのだが、未だかつて上手く行った事は無い。

たいてい、いわゆる推進派／反対派のどちら

からも「中途半端」「何をしたいのかよくわからない」という意見が聞かれ、どちらかに振り切れると、自分としてはやっぱりうまくいかない。

対話の実践例として、いわきの任意団体が主催する「未来会議」がある。未来会議は「対話の場であり議論の場ではない」としており、政策論争自体を行う場ではない。しかしながら、自身の気持ちを率直に伝える勇気を得たり、他者の発言を傾聴する学びを得ることができ、それは結果として熟議の土台をつくるものだと思っている。

課題は、対話から信頼関係を築き、安心して議論に参加できる場づくりは可能かということだ。それを経てはじめて熟議の可能性が拓けると思う。

未来会議で大切にしていることのひとつに、「答えを求めようとすると分断が起こるが、問いを共有すると信頼が生まれる。」という価値観がある。だからこそ、対話の結果ではなく安心して対話できる関係性を構築することの方に重きを置く。私はこの考え方にとっても深い共感を覚えた。

東電で働く人たちが友達で、町をつくる仲間だ。「先輩に言われたから」という理由で彼らはコンビニに行くときも仕事着を脱いで買い物をする。「最近はなくなったけれど、以前は仕事用携帯に町民から電話がかかってきて、厳しいことを言われた」と吐露する人もいる。最近も、我々が主催した町民交流会で、ある方は最後まで東電職員であることを明かさなかった。

一方で、「震災時、あの人たち（東電社員の家族）が一番先に逃げた」という話も聞く。

汚染水（ALPS処理水）放出後、国民の批判の声に耐えられず辞めて行った社員もいると聞いた。私もお会いした事がある方で、自ら幼い子どもと被災しながらも事故と向き合い続けた、まじめな方だったと思う。海洋放出後、私はその方宛にメールをしてしまった。「本当に蚊帳の外だった、これまで『対話』してきた経緯はなんだったのか」と。そうした怒りのメールを送ったのは私だけではないにせよ、申し訳なかったと思う。怒りの矛先を向けるべき場所は他にあったと後悔している。

昨年夏に起きた廃炉作業中の事故では、高線量のために暑い中、迅速に作業せねばとの焦り

からチェックを見逃してしまったのではという事例があった。その他、詳しくは片山夏子著『ふくしま原発作業員日誌 イチエフの真実、9年間の記録』等で見られるような、人権問題になるような作業現場で働く作業員の方々が、この町で暮らしている。

そういうことのの一つ一つが悲しくて、心に影を落としている。私の話をよく聞いてくれる東電の広報担当者がいるのだが、彼に聞いた。「こんな廃炉のプロセスでいいと思ってますか・・・？」返答はなかった。

こうした経験が重なったその結果として、地元では東電は一方的に説明をし、理解を懇願するだけになってしまったのではないだろうか。それを多くの人々は「無責任」「軽視」「表面的」と思うかもしれないし、経営陣および国には多大な罪があることは明白だ。しかし現場の社員は、加害企業の中での被害者でもあると私には見える。

国からも企業からも守られなかった、地域住民の怒りを受ける盾となった、そして今も理不尽な政策の元で作業を遂行しなければならない被害者という側面が。

これについては様々な意見があると思う。しかし未だ東電社員は分断の最中にいる。そして今も身体的・精神的苦痛を背負いながら働いていると思うと、少しでもその痛みを分かち合いたい、少なくとも思ってしまう。



考証館看板

考証館_遺品を手に取りながら説明する里見さん



夜の森_桜

づくりをしたいと考えているので、ぜひ応援してほしい。

3. 故郷（ふるさと）を考える

最後に。対話や熟議について語るときに忘れてはならないもう一つのキーワードは、やはり「故郷（ふるさと）」だ。

富岡町夜の森地区の、特定復興再生拠点だった場所の家を、買った。

これを書くとき炎上しそうな気がする。夫の承諾を得て記載する。

冒頭にも書いたが、ここに住むには職業柄、「なぜか」を説明できねばならない。質問には「子どももいるのに」という枕詞もつくので、これに回答するのは本当に骨の折れる仕事だと思う。

実際に、私から納得いく答えをもらった人もないだろうし、私も納得いく答えをした覚えがない。一番楽ちんなのは夫のせいにあることだ。「夫が夜の森に魅せられて、住みたいんだって」とか。または、「廃炉・復興の行く末を考え伝えるため」とか……。線量という（具体的な明示は避けるが）、暮らしている年間1ミリには到達しなさそうだが屋外は

ちょっと気を付けたいなと思う微妙なラインなのだ。ホットスポットも気になっており、細かく測定して被曝を避ける工夫をせねばならない。

ただ、10年後、買ってよかったなあと思うことだけは確信している。

夜の森に家を買うことをしなければ、私は、多くの空き地が綺麗に草刈りされている理由にも気づけなかっただろう。（※地主は避難中であつても自分の土地を定期的に綺麗にしに来る。そういう見栄のようなものがあるんでしょねと不動産屋さんは言っていた。帰還した田村市の友人も「土地と切り離せない自分の一部」という感覚。すごく良く分かる！」と頷いていた。）10年間、むしろ放置せず最低限管理し続けた大切なご自宅を手放す家主の気持ちを想像することもなかった。ゴーストタウンと言われる町の空家が、一つ一つ魂の宿った大切なものに思えた。かつて帰還困難区域と呼ばれ50年は帰れないだろうとされた地域の一部が、突然「特定復興再生拠点」とされ、道路や一区画のみが解除されていく様子を「自分の未来の問題」として見ることはなかった。

正直わからない、妙になじんでしまったとし

簡単なことだと思う。こんな先の見通せない荒唐無稽な廃炉プロセスを終わりにして、せめて被曝をできる限り抑えたプロセスを再検討すればよいだけだ。でもそれができないのが悔しい。

これから40年以上続く廃炉の現場で、作業員と町民が一体となって町づくりをしていける——そんな関係性になることはできないのだろうか。私にとっては、それが「ALPS処理水放出をどうやって止めさせるか」よりも何段階も重要な課題だ。近いうちに、必ずそのような場

富岡秋_震災前の場所で開催されたえびす講市



富岡秋_イノシシにやぶられたフェンスから町を覗く

か言いようがない。ここに住み続けたい。「と
みおかって、こういうところほんとダメだよ
ね・・・」とデイスってしまいがちな箇所も含
めて富岡町が好きだ。

もしここでまた原子力災害が起こり、避難す
ることになったら、「富岡に帰りたい」と思う
だろう。そのくらいには、愛着をもって暮らし
ている。

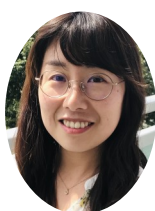
「だから住んでいる人が偉い」とは思ってい
ない。しかしふるさとへのリスペクトなくして
公論形成はあらずというのが、暮らしてみても

率直な感想だ。それは、別に被災地に住みなさ
いという事ではない。今住んでいるそれぞれの
場所が、長い歴史の中で作られてきたかけがえ
のない尊いものだという事だ。どんな場所であ
っても誰かのふるさとであり、それらは決して
奪われたり軽視されたりしてはいけない。

いわき市湯本に開設した原子力災害考証館 f
urusato は、そうした想像力を開放でき
る場所としてあり続けたいと思っている。その
上で改めて一人ひとりが問うてほしい、原発は
本当に必要なのか。

【著者プロフィール】

西島 香織



埼玉県出身。環境社会学を専攻し、大学卒業後は環境NGOで放射性廃棄物問題やエネルギー問題に関する政策提言活動に携わる。2019年より双葉郡富岡町に移住し、現在5歳児・2歳児の母。原子力災害考証館 f u r u s a t o 事務局長。

福島 だより 飯舘村の夏



2010年飯舘村の最初の夏を経験した飯舘村の夏は暑い。でも飯舘村の90%の家にエアコンは無いと知った。しかし、貧しいからではない(確かに貨幣経済の統計では県内の下位に位置するのですが) 必要が無いからです。

私が現在住んでいる家にエアコンはありません、扇風機は備えていますが、年間何日使うか？。

暑いのは標高が高いせいかもしれませんが、しかし日影に入ると涼しい高原気候、夏場は日が翳ると急激に気温が下がります。夜寝る前に家の窓を開け放して寝ます、朝6時ころに窓を開めます、すると昼間外から部屋に入るとヒヤリとします、その心地よさ！。

夏の昼寝は屋敷内の『大きな栗の木の下』です、山から吹き下ろす風が涼しすぎて目が覚めることがあります。

残念なのは空間線量率が高い事、ここ昼寝の場所は0.30〜0.50μSv/h程度(事故前の6〜10倍)になります。お叱り覚悟で言えば、高齢者は良いか？、被ばくのリスクを軽んじている。

1. 飯舘村

こんな素晴らしい飯舘村の現在は、

左の表①の数値でお分かりの通り、事故前は世帯当たり3.81人、三世代同居が多かった、老人が孫の面を見る、若手夫婦が近くの職場で現金収入を得る、土日に農業に取り組む。

現在、飯舘村は原発特措法で、二地域居住が認められている(住民票は村に置いて、住まいは避難先の自治体)ため、村に戻って暮らしている人は少ない(7月現在、旧住民の帰還率は28.9%)。

理由は多岐にわたると思うが、

①根底には放射線のリスク

村内居住者の74%以上が60才以上、高齢化率 61.5%の村(2021年1月現在)

②避難期間が13年にわたったこと

生活基盤が移った、勤務先、学校などが主な理由でないでしょうか？。

項目	人数	世帯数	世帯当り	備考
①事故前（2011.1.1）	6,544	1,716	3.81	
②事故直後	6,544	3,200	2.05	分散避難による
③住民登録者数	4,584	2,095	2.19	2024年7月1日現在
④帰還者（村に戻って生活）	1,186	627	1.89	
⑤新たな転入者	265	128	2.07	2017年3月避難解除
⑥その他村内生活者	62	49	1.27	
⑦村内居住者系	1,513	804	1.88	④+⑤+⑥
⑧県内避難者	2,920	1,200	2.43	
⑨県外避難者	148	88	1.68	
⑩不明	3	3	1.00	
福島県外避難者	20,279			(2024年2月1日現在)

表⑤の新たな転入者（避難指示解除2017年3月末以後に転入した住民）

村（国）は住民が戻らない事を見越して、新規転入者の定住に力を入れている。

①就学期の児童の教育費無償化（給食費、修学旅行負担金、制服、運動着・・・、極論すると親が負担するのはPTA会費と下着だけ？）

村の教育委員会のHPをご覧ください『子どもを育てるなら飯舘村』で案内しています。

②新規転入者の定住資金（住宅取得、リフォーム費用）など破格の補助

③企業資金補助（国75%、村5%）

この措置は、飯舘村のみではなく被災12自治体に適用されている。例えば、村内で営農再開すると、機材の80%が補助される。

2. 豊かな飯舘村

しかし事故前の飯舘村心豊かで食卓も豊かな村でした。たまに現金支払いは肉や魚を飼う程度、その肉だって猪が捕れた時のお裾分け、川魚が豊富で釣り名人を自称する人が多かった。

2010年入村してお近づきになった釣り名人は、近くのダム湖で釣った川魚を冷凍保存し持参して食べ方まで指導してくれたものでした。

たまに猪が捕れた時は捕獲に関わった皆が集まって農家の軒下で七輪で骨付き部分を焼いて一杯飲むのが恒例でした（ヒレ、ロース部分は販売）、私は捕獲には関わりませんし下戸でしたがその席に出席していました。

3. 互酬経済がもたらした豊かさ

村は天明の大飢饉で人口が半減とか、相馬藩の山中郷の位置づけなど歴史のある村ですが、一方で戦後開拓で入村した人たちも多い村です。

開拓作業などで力を出し合う「お互い様」の精神が強く、経済面での協力も強い物がありました。農地はある、コメは作っていないが畑の作物は作っている、玉ねぎを収穫し隣におすそ分けすると、じゃが芋採れたから持っていきたいと持たせてお返しが普通だった。野菜なんか買ったことが無いと聞きました。



紫陽花は8月、9月まで鮮やかに咲く

2010年夏ごろ、近くのSさんが、段ボール箱を勝手口に置いて、これ農協に出せないハネ物だけど味は変らないが食べなさいと、中身は生きのいいインゲンでした。飯舘村のインゲンは美味しい、近くの市場では良い値段で取引されていたそうです。インゲンは好物とは言えませんが、早速調理して頂きました。歯触りも香りもとても美味しかった事を記憶しています。



プロフィール

伊藤 延由
(いとう のぶよし)

1943年 11月生まれ
2010年 飯舘村の農業研修所
「いいたてふあーむ」
の管理人に就く
管理人の傍ら、水田・畑を耕作
2011年 2年目の準備を目前に被災
6月末福島市内へ避難
11月「飯舘村新天地を求める会」
を立ち上げ活動

インゲンと言えばこんな話も。
原発事故で避難し仮設住宅に入居し、すべての食材は近くのスーパーで調達でした、インゲンを買ってきて調理したが、見た目はインゲンだけど飯舘村で食べていたものとは違う、何よりも飯舘村ではインゲンは買うものでなかった、畑の隅に植えてあった。形はインゲンだけど村で食べていたものとは違うと、複数人から聞きました。飯舘村のインゲンを失って飯舘村の豊かさを実感した一コマです。



お知らせ - 福島へ行ってきます -

訪問の詳細は「チェルノブイリ通信137号」に掲載予定ですので、どうぞ楽しみに！

《 日程 》 9月8日(日)～9月12日(木)

《 参加予定者 》 CMNスタッフ 2名、 ボランティア大学生 4名

《 訪問地域 》 浪江町、富岡町、飯舘村など

今回の通信に寄稿文を掲載させていただいた鈴木さんや伊藤さんに富岡町や飯舘村を案内していただく予定になっています。訪問の様子はSNSでも発信しますので、ぜひこちらをご覧ください。



X (旧Twitter) : @cher9_jimu

Instagram : @jimu.cher9

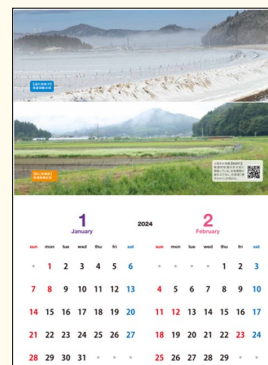
チェルノブイリ支援コーヒー・紅茶購入キャンペーン

2024年12月末までにチェルノブイリ支援コーヒー・紅茶を合計で9,000円以上お買い上げいただいた方へ、2025年度版の福島訪問カレンダーをプレゼントいたします。

ご購入いただいた収益は、甲状腺の検診に必要な消耗品の購入資金に充てる予定です。

注文はメール・電話・FAXで承っております。
ご希望の商品とお届け先をお知らせください。

メール jimu@cher9.org
電話・FAX 092-260-3989



カレンダー（イメージ）

* 年内にお届けをご希望の場合は12月中旬ごろまでにご注文いただけると確実です。

* 福島訪問カレンダーは500円/1部で販売も行います。

カレンダーの購入を希望される方は事務局までお問い合わせください。



チェルノブイリ支援コーヒー・紅茶料金改定のお知らせ

円安やコーヒー豆の高騰などの影響により2024年9月に料金改定が実施されました。

商品により値上げ幅は異なりますが、10%程度の値上げとなっております。
具体的な金額は右記QRコードより団体ウェブサイトのオンラインカタログをご覧ください。

また運送料金の値上げに伴い、送料無料価格も現在の8,000円から9,000円に引き上げさせていただきます。

ご負担をおかけし大変申し訳ありませんが、ご理解いただけますと幸いです。

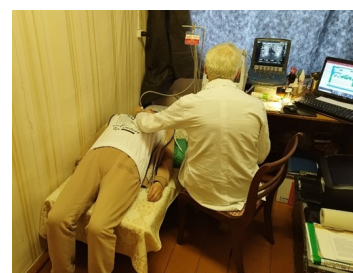


オンライン
カタログ

◇ チェルノブイリ支援コーヒー・紅茶とは ◇

売り上げの一部がチェルノブイリ医療支援ネットワークへの寄付になります。今年度頂いた寄付金は甲状腺の検診に必要なカプラグムの購入資金に充てる予定です。

また、コーヒー・紅茶はすべてフェアトレードによるものです。商品の購入は、無農薬・有機栽培に取り組んでいる現地の生産者の健全な生活を支えることにも繋がります。



甲状腺検診の様子





今回はベラルーシの夏の風景をご紹介します。

紙面の都合上紹介できなかった写真はwebサイトにて公開しています。

5月だより

五月晴れのミンスク。一年でもっとも日差しが強く本格的な夏の暑さを感じさせる時期が到来しました。この春夏期には、青い空や緑豊かな自然がとても美しく、アウトドア休暇が満喫できます。特に人気を誇るのが<ミンスク海>（実際は貯水湖）と呼ばれる観光名所で、卒業遠足の行き先やレジャースポットとして有名です。まるで本物みたいに見える海の景色をバックにクルージング、ピクニック、スポーツなどが楽しめます。浜辺を散歩しながら日の出・日の入りを観賞すると、その絶景に心が洗われます。ここの“海”を訪れる人々にとって、とっておきの憩いの場となっています。

この時期、太陽が出ている時間帯に長く外にいと、こちらでも熱中症にかかるぐらいの暑さを感じますが、夕刻(夜7時以降)は涼しくて快適に過ごせます。といっても日が長く、明け方の5時頃から夜10時近くまでは暗くなりません。

今年の夏はまだスタートしたばかり。学校に通う子供達は6月から3ヶ月、学生は7月から2ヶ月、社会人は夏の1ヶ月間の休みに、それぞれの“時”を過ごします。多くの子供達が参加するサマーキャンプ（スポーツや芸術など様々なテーマ別の学習を目的に1〜2週間泊まりがけで行く夏の学校）、大学生は研修先での職業体験、避暑地への家族旅行などなど。十分な時間とプラン目白押しの“夏”。気温とともに気分も急上昇してゆく心踊る日々が続きます。



① ミンスク海でクルージングの様子（提供写真）



② ミンスク海の夕日（提供写真）



③ 緑豊かな自然（提供写真）



④ ミンスク・ターミナル駅付近：この時期の昼間は日差しがきつく25℃前後まで上がり本当に暑い



⑤ 夕暮れの時期は涼しくなり快適に散歩できる（提供写真）

夏のインタビュー記事は休載させていただきます。

毎号ベラルーシの方へのインタビュー記事をお届けしていましたが、田中さんの体調不良のため今回はお休みさせていただきます。

楽しみにされていた皆様には大変申し訳ありません。

過去のコラムは団体ウェブサイトで公開していますので、この機会にぜひご覧ください。

過去のコラム

はこちら



緊急特集 ふくしま訪問を振り返る

2021年に開始したふくしま訪問も8回目となり、延べ18名（実数9名）の大学生が訪問に参加しました。

これまでの訪問で特に印象に残っている写真とその理由を参加者に伺いました。



JR小高駅改札口（南相馬市小高区）2021年春



JR双葉駅改札口前（双葉郡双葉町）2021年春



東町児童公園（南相馬市小高区）2021年春

現在の福島県内のモニタリングポストは3,600箇所。

初めて福島県浜通り（南相馬市、双葉郡、飯館村等）を訪問した時にモニタリングポストを見たときは驚きました。日常生活している場所にモニタリングポスト（24時間連続で環境中の放射線を測定する装置）が当然のようにあるのはなんともいえませんでした。

この状況がいつまで続くのか、いつまでこの状況にあまんじなければならぬのか本当に復興はできているのかを思いました。

8回訪問していますが今もこの状況に変化はありません。（H.K）



たくさんのご支援を ありがとうございます

(順不同・敬称略)

合計 4,616,431円

*活動支援金	4,464,431円
*のぞみ21カンパ	2,000円
*雪だるま3号カンパ	0円
*東日本支援カンパ	28,000円
*おまかせカンパ	13,000円
*福島訪問カレンダー	0円
*福島訪問の交通費一部	100,000円
*福島県産米10キロ	6,000円
*あじさいの会	3,000円

(2024年5月〜2024年7月分の寄付内訳)

●口座受付寄付

浅原望樹 榎本みつ枝 金只律子 佐藤和子 高嶋幸雄 田中直子 種和子 佃あけみ 引田良子 平川宗信 古本募金 さしやぼん(運営:嵯峨野株式会社) 本田美穂子 松井岩美 村上和代 山田秀子

貴重なご寄付をお寄せいただき、ありがとうございます。皆様よりお預かりしたご寄付は、チェルノブイリ被災者医療支援、福祉工場のぞみ21支援、東日本震災被災者支援、事務費用等にあてさせていただきます。
※通信へのお名前掲載をご承諾いただいた方のみ、ご掲載しております。

〔都道府県別〕

【東京都】 1名	【新潟県】 1名	【栃木県】 1名
【静岡県】 1名	【愛知県】 1名	【鳥取県】 2名
【島根県】 1名	【山口県】 1名	【福岡県】 20名
【佐賀県】 2名	【熊本県】 1名	【大分県】 3名

計36名(匿名含む)

●月々の定額寄付(マンスリー)サポーターの皆さま

相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子 井上礼子 内野千鶴子 江原健一 延壽富美 大麻卓子 大久保伸子 大崎知恵 太田昌子 大場満 小黒慈子 落石久子 片山富美子 金山涼子 紙森優子 亀川早苗 河上雅夫 川崎君子 川尻愛子 木村雅子 倉掛大輔 古賀輝洋 古賀尚子 財津耐代子 財津悠子 斉藤美代子 阪口香奈子 佐々野也依 佐藤一江 佐藤進一 佐藤照子 白浜千恵子 末永浩子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子 田中京子 珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱加 網脇牧子 富永隆史 鳥井原桐子 鳥原良子 永尾ゆかり 中島幸代 中島まゆみ 永野沙智子 西首延子 納富育代 深川哲臣 福井初子 福本勲子 藤本孝子 淵田三輝 古川恵子 松尾智恵子 松木幸美 松永庸子 丸山子より 水本敬子 三野桂子 宮野義治 村西美由紀 室屋芳乃 山下澄子 山中陽子 山本亮輔 吉田美抄子 渡邊久美子

計108名(匿名含む)

編集後記

今年の夏は例年にない暑さが続いていますね。私は買い物の時間を夜にするなど生活パターンを見直して暑さを乗り切っています。この通信が皆様のお手元に届く頃には涼しくなっていますように。(K・T)

お願い

住所 を変更された方は、事務局までお知らせください。なお今後の資料送付がご不要の場合は、お手数ですが、事務局までその旨ご連絡ください。

チェルノブイリ通信のペーパーレス化を進めています

環境負荷軽減および経費削減のためペーパーレス化を進めています。団体ウェブサイトでの閲覧へ変更していただける方は大変お手数ですが、メールやお電話等で事務局までお名前とご住所をお知らせください。

メール

jimu@cher9.org

電話・FAX

092-260-3989

横書きのweb版
できました！



また、会報発行のお知らせメールをご希望される方は合わせてメールアドレスもお知らせください。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。